散り、一本は開き、一本は蕾なり、卽是を圖して、彼田安家庭池にてしたしく見し人に見せしに、かくのごとしといへり、疑ふ所は顧仲方百詠に出せし、並蒂黃荷花の圖は、其莖叉をなして左右にわかれたり、叉成形圖說に出す所の圖も、叉を成してわかれたり、見る所の雙頭は常の蓮莖にして唯二花並ぶのみ、されば成形圖說に所載、顧仲方百詠に出す所は、是ならずして、今圖せしを以是となさん、尤日本紀にも一莖二花と見え、又一莖二蕚といひ、續日本紀にも一莖二花とみえ、秘傳花鏡にも、一幹兩花といひて、叉を成すとは見えず、西土には一蒂三花のものあり、是を品字蓮と名く、一蒂四面の物を四面蓮といへり、皆一莖より生ず、一種年々雙頭に開くは、大坂の豪商鴻池善右衞門にあり、甚秘藏して外へ出さず、淡紅色なりと水戸殿家臣佐藤成裕いへり、

〔日本書紀二十舒明三〕七年七月、是月瑞蓮生於劒池、一莖二花、

〔日本書紀二十皇極四〕三年六月戊申、於劒池蓮中有一莖二蕚者、豐浦大臣妄推曰、是蘇我臣將來之瑞也、卽以金墨書而獻大法興寺丈六佛、

〔續日本紀六元明〕和銅六年十一月乙丑、大倭國獻嘉蓮、

〔續日本紀三十光仁四〕寶龜八年六月戊戌、楊梅宮南池生蓮一莖二花、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年七月九日己未、從四位下行伊勢守多治眞人貞峯、獻蓮一莖二花、

〔嬉遊笑覽十二草木〕享和元年、深川猿江の泉養寺の池に、並頭蓮開て見物群集したり、予も見たりしに紅花と覺ゆ、我衣に寬保二年戊七月、難波の瑞龍寺池中に一莖二花の蓮さく、後に信州大水出づ、深川猿江の蓮開きし翌夜大水あり、異なることなりといへり、

〔延喜式三十大膳三〕正月最勝王經齋會供養料、○中略荷藕半節、○中略

七月廿五日節料○中略

蓮子參議已上五位已上五房、二房、